

最終講義抄録



信州大学の点検評価と大学院の設置

市川元基

信州大学医学部保健学科看護学専攻小児母性看護学領域

## 市川元基 教授 略歴

### [学歴・職歴]

- 昭和57年3月 信州大学医学部医学科卒業
- 昭和57年6月 信州大学医学部附属病院医員研修医（小児科）
- 昭和58年4月 佐久市立国保浅間総合病院小児科医師
- 昭和59年4月 長野赤十字病院小児科医師
- 昭和61年4月 信州大学医学部附属病院医員（小児科）
- 昭和63年4月 長野県立木曾病院小児科医長
- 平成2年4月 信州大学医学部助手（平成7年3月まで）
- 平成5年5月 豪国ラトロープ大学神経免疫学研究室に留学（平成7年3月まで）
- 平成7年4月 城西病院小児科医長
- 平成9年5月 信州大学医学部助手
- 平成9年10月 信州大学医学部講師
- 平成13年4月 信州大学医療技術短期大学部教授
- 平成14年10月 信州大学医学部保健学科看護学専攻教授（令和4年3月まで）
- 平成17年4月 信州大学医学部保健学科長・教育研究評議員（平成23年3月まで）
- 平成24年11月 信州大学学長補佐（平成25年3月まで）
- 平成25年4月 信州大学副学長（企画総括・点検評価）（令和3年10月まで）

### [所属学会]

日本小児科学会（代議員）、日本神経免疫学会、日本看護研究学会、日本看護科学学会等

# 信州大学の点検評価と大学院の設置

市川元基

信州大学医学部保健学科看護学専攻小児母性看護学領域

## 1. はじめに

昭和51年4月に信州大学医学部医学科に入学した。3年生からは医学部の学生寮である美岳寮に入寮した。美岳寮の現在は1人部屋であるが、当時はドアを開けるとカーテンで2つの部屋に分かれ、2段ベッドが備え付けられていた。つまり4人がほとんどプライバシーなく暮らす寮であった。入寮する学生は多くなく、5、6年生になると2人分の部屋を1人で使用できた。そこで2年間1学年上の安河内 總先生（後に日本小児循環器学会理事長）と暮らした。安河内先生のノートは素晴らしく整理されていて、それらをすべて譲り受けて試験に臨んだけれども、余り良い成績ではなかったように思う。安河内先生には登山にも連れて行ってほしい、学生時代も卒業後の人生でも大変お世話になっている。

## 2. 小児科医になって

信州大学医学部を卒業後、昭和57年6月に現在の小児医学教室に入局した。1年間信州大学医学部附属病院の小児科病棟で当時はまだ予後が悪かった小児の白血病の治療を経験させていただいた。その後佐久市の国保浅間総合病院、長野市の長野赤十字病院で小児科医師として経験を積んだ。長野赤十字病院では後輩の小児科医師として中村友彦先生（後に長野県立こども病院長）と一緒に仕事をし、まだ小児科医師として2年目なのにこんなによくできる先生もいるんだ、と感心したが今から思えば当然であった。

## 3. 研究を始める

昭和61年4月に医員として信州大学医学部附属病院に戻り、研究を開始した。当時の小児科は造血幹細胞の培養を中心に研究する培養斑、血液細胞の形態を研究する電顕斑、小児の免疫を研究する免疫斑の3つのグループがあり、免疫斑に所属して小宮山 淳先生（後に信州大学学長）の指導を受けた。主治医として担当した全身型の若年性特発性関節炎の患者さんが一過性にCD8陽性T細胞の増殖をきたし、発熱等の症

状が軽快する経過をきたしたことを症例報告としてまとめる機会があり、この時小宮山先生に小児科医として1つ1つの症例を丁寧に診療し、少しでもその病態を解明するため、研究を行うことの大切さを教えていただいた。その後東京都立臨床医学総合研究所に在籍されていた通堂 満先生にIL-2受容体のアッセイ方法を習い、小児の急性リンパ性白血病で外来通院されている患者さんではリンパ球の高親和性IL-2受容体の発現に異常があることを報告し、博士（医学）の学位を取得した。

## 4. ラトロープ大学への留学

大学で助手として3年間臨床と研究を経験し、小児科でも神経学の分野での研究をできないだろうか、と考えていた時、全身型重症筋無力症の小児が入院され、第3内科の高 昌星先生（後に医学部保健学科教授）に免疫吸着療法で症状の改善が期待できることを教わり、神経免疫学という研究領域があることを知った。高先生に留学先を紹介していただき、オーストラリアのメルボルン郊外のラトロープ大学の神経免疫学研究室へ平成5年5月に留学した。この教室を主宰していたクロード・バーナード教授の元で、多発性硬化症の動物実験モデルである実験的自己免疫性脳脊髄炎の研究を2年間させていただいた。

## 5. 医学部保健学科の教員になる

留学から戻り小児科の講師を経験し、平成13年4月に小児科で同期入局の松岡高史先生の後任として医療技術短期大学の教授に就任した。医療技術短期大学は平成14年10月に医学部保健学科に改組になり、大きく変わりつつあるところであった。それまで経験してこなかった看護学専攻、検査技術科学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻の学生さんたちに小児の成長発達や病気について教えるのに四苦八苦しているうちに、平成15年4月に成沢和子保健学科長の元で学科長補佐になり、平成17年4月に保健学科長に就任した。

## 6. 大学院の設置

保健学科長に就任したのは最初に入学した保健学科の学生さんが3年生になる時で、医学部保健学科は彼らが卒業する平成19年4月に大学院修士課程を設置することを目指していた。既に修士課程設置のためのワーキンググループで設置計画書の原案も作成が開始されていた。設置計画書の原案を文部科学省高等教育局国立大学法人支援課に持ち込むと、何回も文部科学省へ呼び出され、原案の修正を行うことになった。設置計画書の中で「大学院等の設置の趣旨及び特に設置を必要とする理由」の部分で厳しく問われた。当たり前のことではあるが、なぜ信州大学に医学系研究科保健学専攻が必要なのかを国民に対して説明できなければ大学院の設置は難しい。しかし当時はいつになったら、この計画書にOKが出るのだろうか、と悩み、また設置計画書を文部科学省に提出後も大学設置・学校法人審議会（設置審）から厳しい意見がついて、どう対処すればよいのか苦しんだ。この時一緒に考えてくれたのは保健学科の仲間だけではなく、医学部の職員、大学本部の経営企画課（後に経営企画部）の職員の方々であった。また当時信州大学学長の小宮山先生からは「設置審の厳しい意見があったとしても、文部科学省からのOKが出ていれば必ず大学院設置の許可が降る。」と助言をいただき、心が軽くなったことを記憶している。平成19年4月には大学院医学系研究科保健学専攻修士課程を開校し、多くの学生さんたちを迎え入れることができた。

平成19年4月から大学院医学系研究科保健学専攻修士課程の教育が始まるとすぐに博士課程設置の準備に取り掛かった。博士課程の設置は修士課程設置の経験もあり、比較的順調であった。文部科学省高等教育局医学教育課には看護教育専門官がいらっしゃり、現在千葉大学看護学部教授の和住淑子先生が当時その職にあって、設置計画書に関する文部科学省からの問い合わせに際していろいろ教えていただいた。平成21年4月には無事大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程を設置することができた。

## 7. 大学の点検・評価

保健学専攻に無事大学院の設置ができて、平成23年3月ようやく保健学科長の職を降りることができた。しばらくの間のみびりしていると平成24年10月に山沢清人学長からお話があり、平成25年4月から二宮 晏

副学長の後を継いで大学の点検評価を担当する副学長に任命していただいた。平成27年10月に濱田邦州博学長にも副学長に任命していただき、計8年6か月の間、企画総括・点検評価の仕事をしていただいた。

大学が受審しなくてはならない評価は大きく2つある。1つ目の機関別認証評価は国立大学法人の場合7年に1度受審する。国立大学は大学改革支援・学位授与機構の評価を受けることになっている。副学長を拝命した平成25年度に認証評価のための書類を提出し、第2サイクルの機関別認証評価の訪問調査を受けた。前年度に自己点検評価として認証評価のための書類を整えていただいていたため、大きな問題はなかったが、大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程の定員がオーバーしていることを唯一指摘され、おおいに反省した。第3サイクルの機関別認証評価は令和2年度に受審し、「大学評価基準に適合している」との評価を受けた。第3サイクルでは「教育の内部質保証を行う体制が大学にできているのか」を問われた。受審前に書類を整えて学位授与機構に事前相談に行ったところ、各研究科のシラバスの不備やカリキュラムポリシーの不備等をいくつも指摘された。教育の質保証を行う体制が整備されていればこれらのことは起こらなくなるはず、というのが学位授与機構の考え方であった。信州大学では点検評価委員会が中心となって教育の質保証を行う体制を整備できたことを確認してもらい無事機関別認証評価を乗り切ることができたが、これから少しずつでも教育の質保証を実際に進めなければ、第4サイクルの機関別認証評価を乗り切るとは難しいと思われる。

もう1つの評価は6年間の中期目標・計画期間の教育研究や業務の実績を評価される国立大学法人評価である。第2期中期目標・計画では平成22年度から27年度までの6年間の各学部・研究科の現況調査表・達成状況報告書・業務の実績に関する報告書を取りまとめて平成28年6月までに文部科学省へ提出した。現況調査表は各学部・研究科の教育・研究の活動と成果について、達成状況報告書は大学全体の教育・研究・社会地域連携・国際化について、業務の実績に関する報告書は業務運営・財務内容・自己点検評価等について評価された。第2期は研究・国際化で一部高い評価を得たが、全体としては良い評価を得ることはできなかった。第3期は第2期と異なり6年間の4年目評価で主に評価された。平成28年度から令和1年度までの4年間の現況調査表・達成状況報告書・業務の実績に関す

る報告書を令和2年6月までに文部科学省へ提出した。第3期の評価は大学全体の研究は「特筆すべき進捗状況にある」、社会地域連携は「計画以上の進捗状況にある」と高い評価を得ることができ、その他の評価も「順調に進んでいる」と評価され、評価を下げられたものはなかった。各地のキャンパスを巡り、現況調査表の書き方等を説明し、学内の各部署から上がってきた現況調査表・達成状況報告書・業務の実績に関する報告書にすべて目を通して誰が読んでもわかりやすいものに仕上げるのが経営企画部の職員の方々との共同

作業であった。高い評価を得ることができたのは信州大学の教職員の日頃の努力があってこそであったが、私たちの努力も報われた気持ちを持つことができた。

## 8. おわりに

信州大学の教員として定年を迎えること、また大学の管理・運営に関わる仕事に長い間携わることになるとは想像していなかった。多くの教職員、学生さんの皆さんに助けていただいたことに感謝している。